

「白川郷埋没帰雲城調査会」

発行日：平成24年4月15日

会長：安達 正雄

住所：石川県金沢市平和町2-2-13

電話：0762-41-2063

発行：「白川郷埋没帰雲城調査会」事務局 大村 哲哉

目次	1. 会長挨拶	5. 平成24年度事業計画
	2. 副会長挨拶	6. 総会および懇親会のご案内
	3. 現地調査報告	7. 事務局だより
	4. 平成23年度事業報告	8. 会費納入案内

1. 会長挨拶 会員の皆さんへ

安達 正雄

暦の上では春となりましたが、まだ寒い日が続いております。今冬はラニーニャ現象と偏西風の蛇行の影響で、例年より強い寒気が断続的にやってきて当地方は6年ぶりの大雪になりました。金沢地方は積雪がすくない方(最深積雪約70cm、積算積雪約180cm)でしたが、私は老化のためか寒さに負け、雪にも負け、暖かい所へ移住したい気持ちでした。会員の皆さんはお元気でしょうか。

昨年秋、当地方でモズのハヤニエが見つかり、地上約180cmの所に長さ約1mのヘビがハヤニエになっている写真が新聞に載り、例年の約3倍の高さでした。モズは今冬の積雪が例年の約3倍になることを予想していた。モズは優れた感をもっているようだ。モズのハヤニエの地上からの高さ最深積雪の関係を調べると、冬の積雪予報に使えるかもしれません。興味のある方は調べてみて下さい。下記に帰雲城関係のことを2~3書きます。

(1)『三壺聞書』に使われた「阿古」という語について(「会報前号」野田秀佳氏の研究報告を参照されたい)

帰雲城に関係した文献の中で「阿古」という語を最初にもちいたのは、『三壺聞書』の著者・山田二郎右衛門であろう。山田氏は金沢在住の加賀藩の武士でした。(宝永年間(1704-1711)に執筆)。次に「阿古」が使われた文を見る。「飛騨之國阿古白川と云所は在家三百余軒の所」この阿古という語は「あちら」「あそこ」に類する指示代名詞で言葉である(書き言葉は「彼処」。小学館の『日本国語大辞典』によると、近畿とその近県で使われる方言である。(白川という所は京都にも、美濃にもあるが)「阿古白川と云所は」と「白川」を強調するために「阿古」という話言葉を使い、しかも万葉仮名(万葉時代にまだカナがなかったので漢字の音を仮りて表したものを)を用いて、洒落た表現をしたのだが、飛騨では「あこ」という語がつかわれなかったのか、飛騨の人にはこの洒落が理解されなかったようである。それを引用した、『飛騨太平記』上巻(1848年以前)、『飛騨後風土記』(1873年)いずれも「阿古白川」を地名と見てそのまま用いている。『幽討余録』(現代的な題名「辺境探訪特ダネ集」)(1849年)の著者・曾我景章は遠江の浜松生まれで、三河・岡崎藩士だったが、「阿古白川」を地名として漢文の中にそのまま使っている。漢文の中に「阿古」という方言が入っているのは、むしろコッケイである。地名というものは、普通、白川(郷名)、一一(村名)、一一(字名)と大きい方から小さい方へ順に出て来る。「阿古、白川(郷名)・・・」と郷名の前に阿古があるのに、それに気付かず、『飛騨太平記』は無理に解釈している。「白川(帰雲)の城下町を阿古」と書いている。赤穂城の城下町であるまいし、「あこ」といういわれ(由来)はないのである。これは完全に間違っている。

(2) 飯雲山の異名(別称)「魄霊(霊)山」について(「会報前号」野田秀佳氏の研究報告を参照されたい)^a。飯雲山の東の麓に城と城下町があったが、地震による岩屑流で全てが埋没し、約1,500名の人々が圧死したことを知っている人(圧死者の家族か子孫)が命名したと考えられる場合(中国(台湾も含む)の古い仏教では、人体には肉体を司る陰の気の「魄」と精神を司る陽の気の「魂」があるという陰陽二元思想があり、「魄」と「魂」(=霊)という語が使われる。しかし、日本へはこの思想が入って来なかったため霊は一つと考えられている。「魄霊」という語は中国にはない「和製漢語」で、その意味は1字の場合とほぼ同じで①たましい、②亡霊、幽霊の意味しかない。したがって「魄霊山」は「たましいが宿る山」という意味であろう。(ミステリー・ゾーンの亡霊(幽霊)が出る山ではないと思う。)飯雲山を圧死者全員の共同墓標または鎮魂碑の代わりとして異名(別称)をつけたと考えられる。

b. 篤信の仏教信者が命名したと考えられる場合

釈迦が法華経などを説いたと伝えられる霊鷲山にあやかって、まず霊山とつけた。霊山は福島県相馬市と大分県大分市にある。(霊山は三重県伊賀市にあるが、山名は昔山頂にあった霊山寺に由来する。)ので、それらと異なる山名にしようと考えた。飯雲山は1年の大半が白い雪で覆われているので、白霊山とした。さらにはくをつけるために、同じ音の魄といれかえた(こんな洒落たことをすると、後世の人には理解されなくなるが)。そして魄霊山とした。白雪を戴いた霊山という意味である。飯雲山の異名(別称)の命名者は上のa,bどちらの立場で命名したのであろうか。

(3)内ヶ嶋氏理の読みについて

加来耕三氏は著書『消えた戦国武将』では「内ヶ嶋氏理」とルビを付けていますが、これは何に基づいて書かれたのでしょうか。「内ヶ嶋氏理」とルビを付けた史料があるのでしょうか。また内ヶ嶋氏以外でも「氏理」とルビをつけた実例がありましたら、お知らせ下さい。